

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 23 日現在

機関番号：21401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24520221

研究課題名(和文)新資料による金子洋文研究

研究課題名(英文)A Study of Yobun Kaneko with New Material

研究代表者

高橋 秀晴 (TAKAHASHI, HIDEHARU)

秋田県立大学・総合科学教育研究センター・教授

研究者番号：40310982

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：2004年10月に秋田市立土崎図書館に寄贈された金子洋文資料約10000点を用いて、洋文の創作意識や作品の推敲過程について考察するとともに、それを文学史に位置づけることを試みた。また、プロレタリア文学系の作家群や小牧近江、今野賢三ら雑誌『種蒔く人』の主要同人との間でやりとりされた書簡の翻刻・分析を通じて、洋文の公私にわたる人的交流状況を明らかにした。その結果を、学術論文、口頭発表、講演等という形で公表した。

研究成果の概要(英文)：Using around 10,000 items of Yobun Kaneko related materials, which were donated to Akita city Tsuchizaki Library in October 2004, studied Yobun's creation attitude and word improving process in his works, and tried positioning them in the history of literature. Also, brought out personal and professional interactions around Yobun, through reprinting and analyzing the letters between Yobun and a group of Proletarian writers or major coteries from the magazine "Tane maku hito" such as Oumi Komaki and Kenzo Imano. These research results were introduced in the form of academic articles, presentations, and lecture deliveries.

研究分野：人文学

キーワード：日本近現代文学 プロレタリア文学 種蒔く人 金子洋文 小牧近江 今野賢三

1. 研究開始当初の背景

プロレタリア文学の嚆矢とされ一つのエポックを画した雑誌『種蒔く人』および主要同人である金子洋文と小牧近江の研究・顕彰活動が活発化したのは1990年代の後半からである。きっかけは、1998年度日本社会文学会秋季研究大会(秋田大会、1998年10月24日、25日)であった。中心企画であるシンポジウム「『種蒔く人』と現代」では、『種蒔く人』を歴史的に位置付けつつその現代性を照射した。

3年後の2001年10月13日、秋田市土崎において「『種蒔く人』80周年の集い」(『種蒔く人』顕彰会、『種蒔く人』『文芸戦線』を読む会)主催)が開催された。全国各地から約170人が参加し、反戦・平和を提唱した「種蒔く人」運動をめぐる活発な議論が展開された。

「『種蒔く人』80周年の集い」を契機として文学資料の散逸を危惧する声が高まり、それを受ける形で「秋田の文学資料調査収集委員会」が発足(2002年6月)する。秋田県の実情に応え、小牧近江の長女桐山清井氏(2006年3月没)は、小牧近江関係資料2044点を県に寄託。以後、伊藤永之介関係資料(2003年9月寄贈)、小牧近江全資料約30000点(2007年10月寄託)等が続々と集まることになるが、そうした流れの中で金子洋文資料約10000点も寄贈された(2004年10月)のである。そして2011年10月には、『種蒔く人』創刊90周年の集い(『種蒔く人』顕彰会主催、2011年10月8日)が開催され、約150人の参加者を集めた。

2. 研究の目的

秋田県秋田市土崎で創刊された雑誌『種蒔く人』(1921年～1923年)の主要同人であった金子洋文(1894年～1985年)の全遺品が秋田市立土崎図書館に寄贈されたのは、2004年10月のことである。その後「金子洋文資料目録」(秋田市立土崎図書館、2007年3月)は作成されたものの、資料に関する具体的な研究はほとんど進んでいなかった。

以上のような状況を受け、本研究の目的を、未発表の資料群によって、主として『種蒔く人』『文芸戦線』に関わる近代文学史の一部を補うことを遠望しつつ、金子洋文の全体像を明らかにすることとした。

3. 研究の方法

初年度は、小牧近江研究をまとめつつ金子洋文研究との接続を図った。

次に、主として自筆原稿、雑誌・新聞の切り抜きを時系列に沿って調査・分析し、洋文の創作意識とその変遷について考察した。さ

らに、来簡を差出人ごとにまとめつつ人間関係を顕在化した。重要なものは翻刻した。

なお、資料を所蔵している秋田市立土崎図書館から資料の貸し出しを許可されたため、研究室における研究活動が可能となり、効率が上がった。

4. 研究成果

平成24年度は、小牧近江のパリ時代に関する現地調査を行い、小牧が頻繁に出入りしていたアンリ4世校、パリ法科大学、オデオン通りの書店、サン・プリ家などの様子と自伝『ある現代史』および先行研究の成果を照合した。さらに、これまで等閑視されてきた画家藤田嗣治との接点を探るべく、二人が出会ったカフェ・ロトンドや下宿先を訪れた。後半は、盟友金子洋文との書簡の調査に着手した。二人が再会以来終生親友として家族ぐるみで交際している様子を確認し、洋文研究への接続を図った。

平成25年度は、武者小路実篤に関わる書簡類を中心に分析を進めた。たとえば、洋文が武者小路宅に寄寓し始めた日については揺れがあるのだが、1916年12月31日消印の武者小路書簡(はがき)に「来月の五六日頃によかつたら一度来て下さい。」とあることから、それが正月五日以降であることが推定された。また、「しかし君の空想がよすぎると、イリュージョンがこわれる時のことが頭に浮びます。その時の用心をちやんとしておくことを望みます。」といった思いやりに溢れた文言も多く認められた。こうした親密な交友関係を具体的に解明した結果、武者小路が日向の「新しき村」にやってきた小牧近江に有島武郎を紹介したことや、戦時中に家族とともに秋田県の稲住温泉に滞在し『稲住日記』を執筆したことなどを導いた可能性が高いことが判明した。

平成26年度は、主として洋文の自筆原稿の調査に取り組んだ。原稿段階から初出に至るまで極端な改変は認められず、洋文があらかじめ構想をきちんと立てた上で執筆していることが窺われた。また、大正末における洋文の文学活動を検証した結果、プロレタリア文学系の「洗濯屋と詩人」(『解放』1922年4月号)や「地獄」(『解放』1923年3月号)等と、既成文学系の「犬」(『中央公論』1922年5月号)や「女」(『文学世界』1923年5月号)等とを交互に発表していることがわかった。さらに、質的には同レベルであるにもかかわらず、「洗濯屋と詩人」は中村吉蔵によって「時代精神の一角を捉へやうとした作者の健気な努力を無視する事は出来ない。」(「四月の創作」、『読売新聞』1922年4月6日)と認められ、「地獄」は川端康成によって「私の知る限りでは所謂プロレタリア文芸が提唱されて以来の其の要求をも満たすべき最初の傑作」(「三月文壇創作評」、『時事新

報』1923年3月16日)と絶賛されるなど、プロ文系作品の方の評判が圧倒的によいことも明らかになった。それらの事実から、文学青年と政治青年との間をたゆたっていた洋文が、同時代評に強く後押しされてプロレタリア作家となっていくという結論を導いた。

平成27年度は、洋文寄贈資料中、1913年までの洋文宛て今野賢三書簡の翻刻・分析を行った。賢三からは、1912年10月19日の葉書を皮切りに毎月のように書簡類が届いている。上京する賢三を見送った洋文に対し「狂へるやうな別離の悲愁に、思はず昏倒しやうとした。」と認めたり、「僕の如きくだらぬ人間にも、友と云ふ一字を冠してくれたならば、……だゞそれを中心より衷心より兄に願ふ。」(封書/1913年2月17日)と懇願する様子から、彼らが『種蒔く人』を創刊する10年も前から精神的に強く結び付いていたことがわかる。また、1913年5月15日の封書には洋文が俳句に加えて短歌を作り始めたことが記されているし、1914年6月20日の葉書では日比谷の図書館で『秋田魁新報』に掲載された洋文の「緑の秘密」を読んだ旨を記し「筆も円熟して来てあるのが眼立つ(マ)ました。貴方の天才を大に御發揮なさることを祈ります。」と激励している。賢三書簡の検討によって、この時期の洋文に政治性や思想性を見出し得ないことが判明した。

平成28年度は、1913年から雑誌『種蒔く人』創刊(1921年)までの洋文宛て今野賢三書簡の翻刻・分析を行った。その結果、千葉県我孫子の武者小路実篤宅に寄寓中の洋文がそこでの暮らしに満足している様子や、武者小路に賢三を紹介してくれるよう依頼していること、作品を相互に批評し合っていることなどが明らかとなった。

以上、研究期間全体を通じて、金子洋文寄贈資料約10000点の整理・分析を進め、武者小路実篤、有島武郎ら白樺派の作家たちとの接点および『種蒔く人』の同人である小牧近江と今野賢三との長年にわたる交情の実際を具体的に解明した。また、洋文の自筆原稿を中心とする資料を調査し、創作のプロセスを明らかにしつつ、彼がプロレタリア作家となっていく経緯を実証した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

高橋秀晴、「望嶽楼の夢 滝田樗陰と近代文学者」、『秋田魁新報』、土曜文化欄連載(全68回) 2014-2015年、査読なし

高橋秀晴、「金子洋文と同時代評」、『秋田風土文学』、第15号、6-13、2015年、査読あり

高橋秀晴、「武者小路実篤と秋田」、『新し

き村』、第66巻第2号、10-13、2014年、査読なし

高橋秀晴、「武者小路実篤と秋田」、『秋田文学』、第4次第22号、130-134、2013年、査読なし

[学会発表](計11件)

高橋秀晴、「金子洋文宛て今野賢三書簡 - 一九一三(大正二)年~一九一七(大正六)年六月 - 」、秋田風土文学会、2017年2月18日、あきた文学資料館(秋田県秋田市)

高橋秀晴、「『種蒔く人』と秋田の女性」、土崎図書館市民文化講座、2016年10月9日、秋田市立土崎図書館(秋田県秋田市)

高橋秀晴、「『種蒔く人』 - プロレタリア文学を拓く - 」、あきたスマートカレッジ/あきた教養講座、2016年10月8日、秋田県生涯学習センター(秋田県秋田市)

高橋秀晴、「大正文学史と秋田 樗陰・小牧・賢三らの功績」、『美の国アクティブカレッジ特別講座』、2016年3月5日、秋田県生涯学習センター(秋田県秋田市)

高橋秀晴、「プロレタリア文学と秋田」、『真砂婦人学級講座』、2016年2月19日、西部市民サービスセンター(秋田県秋田市)

高橋秀晴、「金子洋文と今野賢三」、『秋田風土文学会』、2016年2月13日、あきた文学資料館(秋田県秋田市)

高橋秀晴、「滝田樗陰と秋田」、『秋田風土文学会』、2015年2月7日、あきた文学資料館(秋田県秋田市)

高橋秀晴、「金子洋文と『種蒔く人』」、『秋田風土文学会』、2014年2月15日、あきた文学資料館(秋田県秋田市)

高橋秀晴、「クラルテ運動と『種蒔く人』」、『日本比較文学会東北支部』、2013年11月30日、カレッジプラザ(秋田県秋田市)

高橋秀晴、「秋田の近現代文学 文学史との関わりを視野に入れて」、『日本詩人クラブ』、2013年5月11日、ホテルサンルラル大湯(秋田県南秋田郡大湯村)

高橋秀晴、「『種蒔く人』の現代的意義」、『土崎図書館市民文化講座』、2012年9月4日、秋田市立土崎図書館(秋田県秋田市)

[図書](計1件)

日本近代文学会東北支部編(共編著/須藤宏明、後藤康二、佐藤伸宏、高橋秀晴、竹浪直人、豊泉豪、松本博明、森岡卓)、勉誠出版、『東北近代文学事典』、2013年

[その他]

ホームページ等

<http://www.akita-pu.ac.jp/stic/souran/scholar/detail.php?id=111>

6. 研究組織

(1)研究代表者

高橋 秀晴 (TAKAHASHI HIDEHARU)
公立大学法人秋田県立大学・総合科学教
育研究センター・教授

研究者番号：40310982